

律
端
亭
編
纂

現代短歌分類詩典

新裝版
29卷

津
端
亨
編纂

現代短歌分類辭典

新裝判
29卷

現代短歌分類辞典

新装版29卷

通巻187

平成五年二月五日発行

定価一六、〇〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒345 埼玉県北葛飾郡杉戸町宮前一九六―五

電話(〇四八〇)三八―〇〇四〇番

振替 東京三―九三―一四

(ISBN4-87706-187-8)

目

次

第二十九卷 (通卷第百八十七卷)

目次		歌数 頁数		歌数 頁数		歌数 頁数	
だに	三六	一	たにふところ	一	三	たねまき (種蒔)	二六
たにあい (谷間・谷合)	九七	二	たにま (谷間)	一九	三	たねもの (種物)	二四
たにうつぎ (谷空木)	五	三	たにむかい (谷向)	一	六	たねもみ (種粃)	四四
たにおと (谷音)	二	三	だにも	二〇	六	たねん (他念)	一四
たにかげ (谷蔭)	四	三	たにみち (谷道・谿道)	四	三	たねん (多年)	一四
たにかぜ (谷風)	一六	三	たにみづ (谷水・谿水)	二五	三	だのう (惰農)	二四
たにがわ (谷川)	二八	三	たにわたり (谷渡り)	六	三	たのしい (楽しい)	二六
たにがわたけ (谷川岳)	一五	九	たにん (他人・ひと)	一〇	三	たのしけれ (楽しい)	二四
たにぎり	一	九	たにんずう (多人数)	二	三	たのしき (楽しい)	二五
たにぎる (手握る)	二〇	九	たぬき (狸)	元	三	たのしき (楽しい)	二五
たにく (谷蟻)	六	九	たぬきこうじ (狸小路)	一	三	たのしき (楽しい)	二五
たにくしよくぶつ (多肉植物)	二	九	たぬきね (狸寝)	一	三	たのしみ (楽しい)	二五
たにぐわ (谷桑)	二	九	たね (種子)	二七	三	たのしみ (楽しい)	二五
たにし (田螺)	五	二	たねあぶら (種油)	二	三	だのに	四
たにせ (谿瀬)	一	三	たねいも (種芋)	一	四	たのみ (頼み)	四〇
たにぞい (谷沿い)	三	三	たねうし (種牛)	五	四	たのみなし (頼み無し)	二
たにそこ (谷底)	八	三	たねうま (種馬)	五	四	たのむ (頼む・恃む)	二九
たにち (谷地)	二	三	たねがしま (種ヶ島)	四	三	たのめーる (頼める)	一九
たにつかぜ (谷風)	一	三	たねずみ (田鼠)	四	三	たのも (田面)	三
たにづたい (谷づたい)	一	三	たねつけ (種付け)	一	三	たのもし (頼もし・頼もしく)	八
たにのと (谷の戸)	七	三	たねび (種火)	一	三	たのもしい (頼もしい)	一

たのもしさ〔頼もしさ〕	三	六〇	たひがらす〔旅がらす〕	一	一七	たひのひ	一	一八
たば〔束・把〕	三	六〇	たびげいにん〔旅芸人〕	六	一七	たびのみ〔旅の身〕	六	一八
だは〔打破〕	二	六三	たびごち〔旅心地〕	三	一七	たびのよ〔旅の夜〕	三	一八
だば〔駄馬〕	一五	六三	たびごころ〔旅心〕	六	一七	たびびと〔旅人〕	三六	一八
たばかり〔謀り〕	五	六三	たびごと〔度毎〕	一七	一六	たびびとさび	一	一七
たばかり〔謀る〕	一	六三	たびごころも〔旅衣〕	四	一六	たびまくら〔旅枕〕	四	一七
たばこ〔煙草〕	七四	六三	たびさき〔旅先〕	九	一七	たびまわり〔旅廻り〕	一	一七
たばこいれ〔煙草入れ〕	一	一二	たびじ〔旅路〕	一三	一七	たびや〔足袋屋〕	二	一七
たばこぼん〔煙草盆〕	四	一二	たびじたく〔旅支度〕	一	一七	たびやかた〔旅館〕	一七	一七
たばこや〔煙草屋〕	五	一二	だびじよ〔茶毘所〕	一	一七	たびやくしゃ〔旅役者〕	七	一八
たばさむ〔手挟む〕	二	一二	たびすがた〔旅姿〕	七	一七	たびやど〔旅宿〕	一四	一八
たばしる〔手走る〕	四	一二	たびする〔旅する〕	一七	一七	たびゆく〔旅行く〕	六	一八
たばた〔田畑〕	三〇	一二	たびそう〔旅僧〕	一	一七	だびんち〔ダビンチ〕	一	一八
たばぬゝる〔束ぬる〕	二	一二	たびそら〔旅の空〕	二	一七	たふ	三	一八
たばねる〔束ねる〕	一七	一二	たびだち〔旅立ち〕	六	一七	たぶ〔賜ぶ〕	五	一九
たわやすし〔容易し〕	三	二五	たびだつ〔旅立つ〕	四	一五	たぶ〔給ぶ〕	二	一九
たばりね	一	二六	たびたび〔度度〕	六	一六	たぶ〔食ぶ〕	二	一九
たばるざか〔田原坂〕	二	二六	たひち〔タヒチ〕	五	一六	だふ〔懦夫〕	二	一九
たび〔足袋〕	二〇七	二六	たびづかれ〔旅疲れ〕	一四	一七	たぶう〔タブー〕	一	一九
たび〔度〕	六三	二二	たびで〔旅出〕	七	一七	たぶき〔髭〕	一四	一九
たび〔旅〕	二〇四	二二	たびどり〔旅鳥〕	一	一七	たふさぎ	二	一九
だび〔茶毘〕	一	一六	たびにつき〔旅日記〕	四	一七	たぶせ〔田伏〕	二	一九
たびがえり〔旅帰り〕	四	一六	たびね〔旅寝〕	一〇	一七	たぶたぶ	九	一九
たびかばん〔旅鞆〕	七	一七	たびのころも〔旅の衣〕	六	一八	だぶだぶ	七	一九

だぶつく	一	一五	たばたば	三	二〇三	たまぐす〔玉樟〕	三	二四
たつとし〔尊し〕	八五	一五	だぼだぼ	一	二〇三	たまくら〔手枕〕	四	二四
たぶね〔田舟〕	二一	一六	たま〔玉〕	八	二〇三	たまご〔卵・玉子〕	四	二五
たぶのき〔榊〕	四	一七	たま〔球〕	一六	二〇四	たまごがた〔卵形〕	四	二五
たぶらかす〔誑かす〕	五	一七	たま〔弾〕	一七	二〇七	たまごぎけ〔卵酒〕	一	二五
たふり	一	一七	たま〔多摩〕	二〇	二二三	たまごめし〔弾込めし〕	一	二五
たぶる〔食ぶる〕	一六	一七	たまあえる〔魂合える〕	七	二二四	たまごやき〔卵焼き〕	一	二五
だぶるしいと〔ダブルシート〕	一	一六	たまあじさい	二	二二五	たまさか〔偶さか〕	二〇	二五
だぶるぶれい〔ダブルプレー〕	一	一六	たまあられ〔玉霰〕	二	二二五	たまさかに	一五	二五
だぶるばたん〔ダブルボタン〕	一	一六	たまいし〔玉石〕	二	二二五	たまざき〔玉笹〕	一	二六
たぶん〔多分〕	四	一六	たまいれーて〔玉入れて〕	一	二二五	たまざん〔珠算〕	二	二六
たぶん〔多聞〕	一	一六	たまう〔給う・給ふ・賜ふ〕	八四	二二五	だまし〔騙し〕	四	二六
たべーて〔食べて〕	四	一六	たまう〔賜う〕	一	二二四	たましい〔魂〕	七四	二六
たべている〔食べている〕	三	一六	たまがき〔玉垣〕	二七	二二四	たましき〔玉敷〕	六	二七
たべのこし〔食べ残し〕	四	二〇	たまかぎる〔玉隅〕	二	二二五	たましく〔玉敷く・珠敷く〕	四	二七
たべのこす〔食べ残す〕	一	二〇	たまがわ〔玉川〕	六	二二五	たましずめ〔鎮魂〕	三	二七
たべもの〔食べ物〕	二四	二〇	たまがわ〔多摩川〕	一四	二二七	たましま〔玉島〕	二	二八
たべる〔食べる〕	七	二二	たまがわじょうすい〔玉川上水〕	一	二二四	たまじやり〔玉砂利〕	三	二八
たべん〔多弁〕	三	二二	たまきわる	一五	二二四	だます〔騙す〕	一	二八
だほ〔拿捕〕	四	二二	たまきる〔魂消る〕	一	二二四	たまずさ〔玉梓・玉章〕	一	二八
たほう〔他邦〕	一	二二	たまきわる〔魂きわる〕	一	二二四	たますだれ〔玉簾〕	五	二八
たほう〔多忙〕	八	二二	たまぐし〔玉串〕	三	二二三	たますだれ〔玉簾〕	二	二八
だばく〔打撲〕	一	二二	たまくしげ〔玉櫛筍〕	二七	二二四	たまだな〔魂棚〕	二	二八
だほせん〔拿捕船〕	二	二二	たまくしろ〔玉釧〕	二	二二四	たまたま〔偶偶・適適〕	五八	二八

たまだれ〔玉垂〕	三	二五	たまのをぐし〔玉小櫛〕	一	三三	たまり〔溜り〕	四五	三九
たまつき〔玉坏〕	一	二五	たまはだ〔玉肌〕	一	三三	たまりば〔溜り場〕	三	三八
たまつくり〔玉造〕	四	二五	たまふ〔給ふ〕	四	三三	たまりみず〔溜り水〕	三四	三九
たまづき〔烏瓜〕	四	二五	たまふき〔玉房・玉総〕	五	三三	たまる〔溜る〕	三七	三九
たまつばき〔玉椿〕	三	二六	たまふーな	二	三三	だまる〔黙る〕	二〇	三六
たまて〔玉手〕	六	二七	たまふーはや	一	三三	たまれいえん〔多摩霊園〕	一	三六
たまとおる〔徘徊る〕	一	二七	たまふーべき	一	三三	たまわす〔賜わす〕	四	三六
たまどうぶつえん〔多摩動物園〕	一	二七	たまぼこ〔玉鉢〕	三	三三	たまわる〔賜る〕	二六	三七
たまどこ〔玉床〕	一	二七	たまぼこの〔玉鉢の〕	二四	三三	たみ〔民〕	五六	三七
たまな〔玉菜〕	三	二八	たまばち〔多摩墓地〕	四	三四	たみくさ〔民草〕	五	三九
たまな〔玉名〕	一	二八	たままつり〔魂祭〕	七	三四	だみごえ〔濁声〕	四	三〇
たまに〔偶に〕	三	二八	たまみづ〔玉水〕	七	三四	だむ〔ダム〕	三	三〇
たまねぎ〔玉葱〕	五	二九	たまむし〔玉虫〕	一六	三四	たむ〔溜む〕	六	三二
たまねぎばたけ〔玉葱畑〕	二	三〇	たまむしいろ〔玉虫色〕	二	三四	たむけ〔手向け〕	七五	三二
たまのあせ〔玉の汗〕	五	三〇	たまも〔玉藻〕	四六	三五	たむけ〔峠〕	一	三五
たまのうらわ〔玉の浦回〕	一	三〇	たまもぐさ〔玉藻草〕	一	三六	たむろ〔屯〕	八四	三五
たまのい〔玉の井〕	一	三〇	たまもなす〔玉藻なす・如玉藻〕	二	三六	たむろする〔屯する〕	二七	三五
たまのうてな〔玉の台〕	二	三〇	たまもの〔賜物〕	六	三六	ため〔為〕	三三	三六
たまのお〔玉の緒〕	六	三〇	たまも〔玉藻よし〕	六	三七	だめ〔駄目〕	九	三六
たまのこし〔玉の興〕	一	三三	たまや〔靈屋・魂屋〕	二	三七	ためいき〔溜め息〕	二	三六
たまのさかずき〔玉の杯〕	一	三三	たまゆら〔玉響〕	四七	三七	ためいけ〔溜池〕	一	三六
たまのはだ〔玉の肌・玉の膚〕	四	三三	たまらーない〔堪らない〕	四	三九	ためゐる〔溜めゐる〕	一	三六
たまのみこえ	一	三三	たまらーぬ〔堪らぬ〕	三	三九	ためし〔例〕	六〇	三七
たまのり〔玉乗り〕	三	三三	たまらふ〔溜らふ〕	二	三九	ためし〔試し〕	二	三八

ためす〔試す〕	二三	三六九	たゆむ〔弛む〕	二	四〇八	たらたら	二	四三
ために〔為に〕	三五	三六九	たゆら	一	四〇九	だらだら	三	四三
ためらい〔躊躇い〕	二七	三七六	たよう〔多様〕	一	四〇九	だらだらさか〔だらだら坂〕	七	四三
ためらう〔躊躇う〕	八	三七九	たよたよ	九	四〇九	たらたらと	二	四三
ためる〔溜める〕	二	三六一	たよたよと	一	四〇九	たらちね〔垂乳根〕	一七	四三
ためる〔撓める〕	四	三六一	たより〔便り〕	四三	四〇九	たらちねの〔垂乳根の〕	一五	四六
だも	九	三六一	たより〔頼り〕	三	四〇九	たらちり〔鱈ちり〕	二	四三
たもうせい〔多毛性〕	一	三六四	たよりない〔頼り無い〕	五	四〇〇	たらつぷ〔タラップ〕	六	四九
たも〔藪肉桂・天竺桂〕	六	三六四	たよりなき〔頼りなき〕	三〇	四〇〇	たらはしぬ	一	四〇〇
たもつ〔保つ〕	三三	三六四	たよりなく〔頼りなく〕	八	四〇二	たらひぶね〔鹽船〕	二	四〇〇
たもてる〔保てる〕	三三	三六三	たよりなげ〔頼りなげ〕	六	四〇二	たらへり〔足らへり〕	一	四〇〇
たもと〔袂〕	二〇	三六三	たよりなし〔頼りなし〕	八	四〇二	たらむ	三	四〇〇
たもとほり〔袂ほり〕	四六	四〇〇	たよる〔頼る〕	三	四〇二	たらよう〔多羅葉〕	七	四〇〇
だもの〔駄物〕	一	四〇二	たら〔櫓〕	七	四〇三	だらり〔垂帯〕	八	四〇〇
たもれ〔賜れ〕	三	四〇二	たら〔鱈〕	二六	四〇三	だらりと〔垂帯と〕	四	四〇〇
たやす〔絶やす〕	三	四〇一	たらい〔鹽〕	毛	四〇四	たり	二六	四〇〇
たやすい〔容易い〕	一	四〇二	たらう〔足らう〕	一五	四〇五	だりあ〔ダリア〕	二二	四〇三
たやまかたい〔田山花袋〕	一	四〇二	だらく〔墮落〕	二	四〇九	たりあかる	一	四〇六
たゆ〔絶ゆ〕	一〇九	四〇一	だらけ	二四	四〇九	たりお〔垂尾〕	五	四〇六
たゆう〔太夫〕	二四	四〇三	たらこ〔鱈子・タラコ〕	一	四〇九	たりき〔他力〕	二	四〇六
たゆく〔弛く〕	二	四〇四	たらず〔垂らす〕	四二	四〇九	たりきほんがん〔他力本願〕	一	四〇六
たゆさ〔懈さ〕	一	四〇四	たらず〔足らず〕	二四	四〇〇	たりくも〔垂雲〕	一	四〇六
たゆし〔弛し〕	一五	四〇四	たらず〔不足〕	一	四〇二	たりげ〔垂毛〕	一	四〇六
たゆたう〔揺蕩う〕	一七〇	四〇五	たらずしもなし〔無不足〕	一	四〇三	たりけり	二	四〇六

たりし	四	四七
たりとも	三	四七
たりは〔垂葉〕	一	四七
たりばな〔垂花〕	一	四七
たりほ〔垂り穂〕	一五	四七
たりよう〔多量〕	一	四八
たりよく〔多力〕	一	四八
だりよく〔惰力〕	三	四八
たりる〔足りる〕	三	四八
たる〔樽〕	七	四八
たる〔足る〕	二六	四九
たる〔垂る〕	三三	四四
たる	九	四五
計	二〇、一九二首	

けふしまし雲を仰がてありしだにころあはれむ夕餉につきて①	金子 信三郎
今日の日にちかき明日まで明後日まで変らじとだに云はぬ人かな⑧	與謝野 晶子
けふの日の大御心ぞ泣かれぬるはかりまつるだにかしこかれども	米川 稔
けふの日の事をつづまり在りかてに常たゆたへる心だに風げ①	佐藤 佐太郎
今日のわが多辯のなかの一つだにをとめご君ら後に伝へよ⑧	岡野 直七郎
今日はまた明日の昔ぞここにしてかく思ふだにむなしかるべし⑨	尾上 柴舟
獸だに種をたふとぶ濠洲の原産といふ緬羊を飼ふ⑩	松村 英一
言挙ぐるその勇氣だにあらしめば成るも成らぬも問ふところならず⑬	土岐 善麿
健康にわれのかかはるひとだに軍進めりあらしのごとく②	白井 大翼
建設機材積める船だに軸照り悠々として赤道を越ゆ①	金子 信三郎
現代に生ける身にしてなどが吾れ現代人たる意識だになき③	岡本 大無
剣蘭の太葉の照りのつやつやとみ冬だにともし独り灯のもと①	加納 小郭家
口上に並ぶ役者は誰誰ぞかく問ふにだにうつつきひと⑭	吉井 勇
業に得し錢をすらだに己れのみに使ふは憚る今の世に棲めは	宇都野 研
興廃の危機にし立ちて微塵だにゆるがぬ岩の意志をもてりき⑧	太田 水穂
越えがたき川をへだてて呼ばへども声だになしや遠白き国⑨	太田 水穂
小貝だによらぬ渚のやはら砂踏みつつ冬のあたたかかりけり②	松本 常太郎
子が呼吸の絶えむに間なし生きの世の面しばしだに見守りてゐむ②	本居 亮一
(現代短歌大系)	
小金井のことのながれのほすれば花のかげだにうつりかねつつ①	昭憲皇太后
木枯の吹き拭ひたる昼の空あがれる紙鳶の一つだにあれ⑫	尾上 柴舟
極楽の浄土のありや無しやだに知らぬ吾れなり成りのまにまに②	岡本 大無
ここに来て君が命をなげくだにわが身ともしく思はざらめや①	古泉 千樫
情うすきわれにやあらむ十年経てはや夢にだに見ずなりし母④	塚田 菁紀

心ざま清しきままにしたしみきうちつけにいふ一言にだに②	白井 大翼
この人はみづからをだに欺きて生きてましとは思はざるかな③	中原 綾子
このままに豈挫けめや焼跡の冬草だにも緑なすもの	岡野 直七郎
このゆふべ尾花なみよる風もなし鶉だになけ真野のかや原	渡辺 重春
此の夜も夢に亡き父を見ぬ夢にだに父に非情なりし吾の悲しさ①	鈴木 金二
この丘にいたく明るき思ひ出のその一人だに行方知らえず④	小暮 政次
小走りに道路よこぎるわが姿われながらだに若くはあらず④	谷 鼎
恋ひもしつ恋はれもしたる若き日のふたたびとだにくることはなし⑩	太田 水穂
玉敷の庭にすむだにあるものを重荷をおへる馬やあるなり⑤	樋口 一葉
来む秋はたのまれぬ身ぞしばしだに影をば見せよ望の夜の月	落合 直文
米専売説きは既に昔にて農民すらだに信ずるなかりき⑨	吉植 庄亮
子らのため生きてだにゐよ母なくば幼きものはいかなるらむ (新集)	小田島 孤舟
衣だにふたつとききし言の葉の霧にぬらさぬ袖なかるらむ	福田 行誠
昆布のつく北の極なる札文の島流されてだに見むと思ひし④	石 樽 千 亦
才幹の秀でしといふ花婿の微動だにせぬ横顔をみぬ②	高橋 希人
裁判所の庭の桜も今は咲いたがしみじみと見る一人だにない③	矢代 東村
草莽の孤の臣と思ふだにかしこきかなや涙あふるる④	白鳥 義千代
象を降り駱駝を降りて母と喚びその一人だに走りこよかし (夏より秋へ)	與謝野 晶子
性にだにめざめあへなくに嫁ぎゆく妹とおもふはぐくみたまへな①	五 島 茂
前の世は、貝にかもあらむ、これの娘は、口をつぐみて、応へだにぜ	福田 夕咲
ず①	
酒にのみおもひをやりし一年とかへりみるだに白しわが髪④ (現代短歌大系)	長谷川 銀作

些事にただに忿りたつ母の老い老いてひとり言になる炬燵入りて②	村田利明
さすらひの雨露のしのぎの家ごもり土一つかみだにままならず③	岡麓
雑草のあひだあひだに土の見ゆ黒々として手はふれがたし⑦	土岐善磨
寂しければ夜も眠らで明かすなり夢を見てだに命消ぬべし⑭	吉井勇
淋しさの影を求めてゆききせど閉ぢしまなこの上にだになし①	萱沼利子
さみだれの音のみききてくらす日は宮の内だにいぶせかりけり①	明治天皇
さらでだにさびしきたびのゆふぐれをかりがねとほくしぐれふるなり	丸山作楽
さらでだに長くもあらぬ冬の日をはし切るばかり降る時雨かな⑤	井上文雄
さらでだにひとりぬる夜はさびしきにうちしめりたる夜半のはるさめ①	樋口一葉
さらでだに踏分がたき草むらに虫のねたかし岡ごえの道①	東久世通禧
さらにだにさびしきものを若き日は美しかりきと残酷に云ふ④	矢沢孝子
さらぬだにつもらぬはるの沫雪にをりをりあめのまじりけるかな	小出繁
さらぬだに峻しき道ぞ時ありてその道をしも往かざるべからず③	井出一太郎
さらぬだにかたぶきやすき月かげをへだつものかのきの青桐②	明治天皇
さらぬだにかなしきものを諸苦所因貪慾為本の女といはれ④	佐田節子
さらぬだにかわくともなき藤ごろも今日のわかれにまたぬらすかな①	落合直文
さらぬだに霧落ぬべき白かしの若葉が上に雨そそぐなり	村山松根
さらぬだに淋しき秋を夕べ夕べものおもへとや風のふくらん	樋口一葉
さらぬだにしめりがちなる故郷に窓うつ雨の音のきこゆる①	明治天皇
さらぬだにせばき苔路をこのごろは咲きかくしけり秋萩のはな④	鍋島直大
さらぬだに訪ふ人もなき槿の戸をとぎしはてたる梅雨の雲	杉浦桧
さらぬだに塵なきませの白菊に月のひかりも匂ふ夜半哉①	東久世通禧

さらぬだにものなつかしき春の夜のおぼろ月夜にちるさくらかな①	明治天皇
さりげなきそのみ言葉の端にだにふふみ余れるみこころを汲む④	中山あい子
沢蟹のかたき甲らを今しいま手にはがすがだになつかしきかも	古泉千樫
しあはせはこころにありと聖だにおよそ食声りて言ひしにやあらむ	山本友一
椎の木の樹皮煮にけるひまにだに嘗てきほひしわれを蔑しむ①	三浦義一
潮引きし朱の廻廊めぐりゆき幼き記憶一つだに無し④	高安国世
しきたりのごとくに嫁ぎゆかむこと思ひみるだに堪へがたかりき①	久方寿満子
敷道の石のつぎ目の土にだに萌えいづる草のいのち思はむ②	岡野直七郎
詩心だに豈ありとせむ惟神さながらにして思ひ入るべし①	岡本大無
資材なく人材もなき国にして何ぞよきものの一つだににあらむ②	岡本大無
地震ふるも動きだにせじ高々に地軸を抽きて立てる磐山③	岡本大無
静けさのたのしき思沁みたれや村のまひるを山羊だに啼かず⑫	尾上柴舟
したに持つなげきありとも花を見れば花にあそばむゆとりだにあれな③	高橋英子
死といふ事にも心かたぶかぬこの一つだに悲しきものを④	尾上柴舟
自動車の残しし道のにほひだに故郷にし居ればなつかしきかな④	尾上柴舟
信濃にはこのいく年かくらししが赤彦大人の墓参だにせず④	岡麓
死にし日の面保つまま冬越えしなきがらにだにあはむ術はなし②	谷鼎
死目には父母子にも相あはず勤めしとだにせめて思はむ②	森山汀川
師の遺稿編み居るわれを励ましし君が音信は二十日に経ず①	森山汀川
師のなきけ友の心の美しくしきありつる世をばよそにだに見よ③	中原綾子

柴栗の柴の枯葉のなかばだに如かぬちひさき栗の味よき⑬

しばしだにありし親しみ船下りて岸に行く人の皆手を上ぐる⑪

しばしだに此の病癒え年老いし夫に優しく仕へたきもの（朝日短歌二）

しばしだに力ゆるべずわが船のへさきにそひてはしる海豚ら④

しばしだに「時」の車の輪をとどめふりかへり見む神としもがな①

しばしだにとどまらめやも丹頂の頸たわわに嘴はこびつつ①

しばしだに墓原くれば遊びありくひとの如くに心なごめる⑥

しばしだに人とあらむと思ふにぞおつる夕陽は花にあかるし②

しばしだにまちかく見むと露ながらかめにさしたる朝がほの花①

しばしだに見むと思へど湖の風いたぶり吹きて砂を目に入る⑦

しばしだに安からしめよとりがなく（アガツ）吾妻やまのあをき月夜を④

しばしだに息らふ心ありがたと法話聞きをり目をふさぎつつ②

しばしだにわすれまつらむすみぞめの袖ふりかくせ今日の白雪①

しばしだに我が思清くあらしめむ夢みるとふ処女子のため

しばふけばつとめの如く水を飲みひと夜はただに汗ながれけり（新萬葉）

暫しだにながらふ命惜しからめ業の鬼なる君業のため⑥

しましだにともにあらむと思ひつつ滝のほとりの岩にのぼりぬ

島ずみの身にはたまたま鴉らの声だにともしききゐる吾は①

耳目（ミミ）盲（メクラ）心戯（アソビ）諺（ことわざ）であらなくばこの一日だに世に活きがたし②

霜ぐもる朝々子等と飯を食ふひとり児だにもなき人思ひて

借財に重き心に一日だに明るき日よと雨見つつ居り①

石鹼水（しよんず）うちつれ吹きし父とだにその想ひ出のなかにあらしめ①

若山 牧水

尾上 柴舟

長畑 房江

菊池 知勇

相馬 御風

岡山 巖

斎藤 茂吉

北見 志保子

明治 天皇

岡野 直七郎

生方 たつゑ

岡本 大無

落合 直文

土屋 文明

郁沢 春樹

鈴木 康文

中島 哀浪

加納 小郭家

中沢 庭柯

斎藤 茂吉

鈴木 金二

中島 哀浪

斜里岳（しやうり）がひがり杳（はら）かに霞むだに光ふかぶかしあはれ湖（うみ）の上の空③

宿業の生命をまたく終へにけるこの一つだに人をはげます③

受胎季のあらしに実づき貧しけれ葡萄色づく明日だに食はむ①

浄書に入手は借らず一字だに書き損ねなくかき給ひたり③

白雲のかげだにみえずわたのはら空なぎわたる朝ばらけかな

知らざるを朝よりなげくいささかも足らへりとだに我は思はず

白萩の花をめでつつしましだに静かなる心たちてあらむ②

白木蓮の花びら清く一つだに傷つかぬけさの時を惜しめり①

皴腹（しづこ）を掻き切りて義をとほしけむ昔の老の愚直だにあれ⑤

信じうる何かあらむと言ひなはつ一人だになく卒業期来る③

人生の些事なりながら究めたるものの尊さ蠅（は）をうつだに⑩

末の子を女学校に入れしばしだにこころ落ちるてわれ老いむとす⑤

過ぎゆきしものはうつくしわが経たることだに顧みればうつくし（現代）

短歌叢書

相聞歌のかの一群を思ふだに君の歌書（うたがき）かがやきにけり③

總裁（そうざい）をだにきめられぬ黨ありて七十四議會開かれむとす②

象を降り駱駝を降りて母と喚びその一人だに走りこよかし

袖長くかざす扇の舞の袖おもひみるだに楽しきろかも⑩

その傍（かた）そのほとりだに過ぎもせずもだえて死ねり突きそれし球（は）（はつ恋）（はつ恋）

その後のいとしき運命（きだめ）を知れる人のありと聞くだににはかに恋し⑩

その地位を剥がれなば後に残るものいくばくありや稀にだにおもへ①

山下 秀之助

四賀 光子

川浪 磐根

岡本 大無

樋口 一葉

三浦 守治

熊谷 武雄

立花 馨

西田 嵐翠

大岡 博

小野 昌繁

吉植 庄亮

半田 良平

谷 鼎

塚田 菁紀

森園 天涙

與謝野 晶子

尾山 篤二郎

土岐 善麿

土岐 善麿

谷 鼎

そのまにうつぶしぎまに果てにしときぐだにあれやあはれ吾が友⑨	太田水穂
その身だに修むるをえば学ばずも学びたりとし孔子も云ひにき⑧	窪田空穂
そびえ立つ天の岩群帯ぶ雲のやさしさとだにもあらぬ寂しさ③	吉田正俊
そよとだにたよりばかりはあれかしと花にも風をいのるころかな①	鮎貝槐園
そればかり後なしと云ふものがたり稚児だにあかずましておん妻 (佐保)	與謝野晶子
太陽は無礙の火球の光芒を秒刻にだに惜しむことなし①	金子信三郎
台湾は一顆のくだものを饗ゆるだに吾をおどろかすこの新鮮さ⑩	吉田正俊
王蜀黍の葉を擦る夜の暑き風はぐくまん夢のひとつだになし⑥	木俣修
簾のあるあと見れば其処にだにありけむ家のあとかたもなき⑤	尾山篤二郎
卓上の菊枯れしまま久しかりひとを思はむ浅夜だになく②	葉山耕三郎
笥のそれには似ずてさばてんは一重だに著すま裸のまま③	岡本大無
樂しかりし夜を思ふことすらにだに許されぬ身となりにけらずや②	吉井勇
頼まれし君が歌集を一目だに生きの眼に見せたかりしを⑨	岡野直七郎
たはやすく生きゆく人の一人だに世にあるものと我が思はなくに	矢代東村
たはやすく千八百円の伴といふわれはそれだに得られぬ月あり④ (角川)	吉野秀雄
旅をきて為すことなげどにこりなくこころ洗はれてゐよ一日だに④	生方たつゑ
たへがたき渴き覚ゆれど手をのべて林檎とるだにもうき日かな (悲しき玩具)	石川啄木
堪へがたくさびしき秋の山なれば草の花だに折らむとおもはず⑫	尾上柴舟
喰べ継ぎの飯米にだにことを缺く地主多しとふこの豊秋を⑤	吉植庄亮
たまさかに生けりと思ふだに寂しかり道遠くして止まらざらむ④	島木赤彦

玉敷の庭にすむだにあるものを重荷をおへる馬やあるなり⑤	樋口一葉
たまたまのこのいたつきに心疲れものに食はず昼を眠りし⑤	松村英一
手むきだにかかへあまれる榎松はみ雪ふりてぞいよよ仰がる⑨	太田水穂
たらちねの命思へば能登の奥の海山動きただにおちあらず (新萬葉集四)	作田良雄
たらちねの母の命は子に寄りてだに極まるその厳しさ④	松岡貞総
誰そ此処に横はれるはあはれだにそ死をうべなはず人を恋ふるは⑪	與謝野晶子
短命の相といはれて七十才迎へし秘密吾だに知らず⑤	植松寿樹
丹列妹の目見はもねびぬうべなながなべてだに年の緒とほみ⑧	安江不空
小さな家の行事に一つだに改めてここに新日本あり⑧	土屋文明
近くる蝶だにたたず大づちをちからのかぎりたけびふめども②	井上通泰
知覚なき腓ひたむきに刺す蚊だにあはれがりつつ我は見むとす①	加納小郭家
近近と寄するわが面と駒草の花の間にだにさ霧は走る②	山下陸奥
ちちといふ名をだにしらぬみのむしの身の果いかならむとす蘭①	福田行誠
(現代短歌大系)	
慎みつつ恋ふればあたら爪ぐれの余所見の間だに散らずと云はんや②	中村憲吉
燕だにとはすなりぬる故郷のかやがのきばに春雨ぞふる②	明治天皇
つはものを豺狼のたぐひぞといはぬ詩人一人だになし⑬	川田順
妻は悲し、病篤しといふ期だに嫁ぎし家を離れむとはせぬ③	西川百子
摘草に吾子つれゆかむ一日だにおもひまかせず春あわただし①	筏井嘉一
梅雨ぐもり雨となれかし青桐の葉だにゆらぎてむし曇さ逐へよ⑬	窪田空穂
露にだにたへぬかへでの若みどりふるむら雨にうちなびきつつ (新萬葉集別)	波多野敬道
露にだにみだれがちなるかるかに秋風ぞふく武蔵野の原①	明治天皇
露はらふ風だにしらぬ大宮の小瓶の菊の香こそふかけれ①	昭憲皇太后

露をだにわびしと思ふ秋萩のつれなくかかる村しぐれかな③

樋口 一葉

辛くして人を欺き得たるだによりこびとして人生くるらし①

谷 鼎

釣舟の一つだになき海の青病後のわれの眼には強かり⑤

尾上 柴舟

手当だによければなほもいつまでも生きはうべけんかなしきやまひ

三ヶ島 葎子

(新萬葉集八)

停車場の人のにぎはひ一人だに見落すまじと徒らに立つ

望月 光

手植ゑせず手刈せずさはに米穫れる現代を妻よ夢にだに見よ⑥

鈴木 康文

鳥海の山の壁雪真夏だに消えずときくに秋もふけつつ⑩

尾山 篤二郎

手紙やれどかへりごとだになき人のふと帰りこん今日かと思ほゆ(新万葉集八)

三ヶ島 葎子

手触るだにきたなとのみも思ひ来しその阿屠物のなきがすべなさ①

岡本 大無

天井の嵐すらだに子を連れて走るよ吾が子われに還らず①

菊山 当年男

天地崩ゆ生命を惜む心だに今しばしにて忘れはつべき⑩

與謝野 晶子

扉あけて宵闇に立つしばしだに草いきれたるにほひこそすれ

堀内 通孝

遠き薨あふぎ見るだに哀しまむこころの涙辛うじて保つ③

山下 秀之助

名高くならせといはじ横顔の美しきだに愛しき君を

杉浦 翠子

なつかしく軒の橋かをるなり星ひとつだにみえぬ雨夜に①

昭憲皇太后

夏草の伸ぶるがままにある庭は人の下りけむ気配だになし①(現代短歌大系)

森山 汀川

夏の秋やこころ少女のひとりだにわがものならぬかなしみをすする④

若山 牧水

夏山のとときすだに人の名に啼くと聞きしは誰にかあらん②⑥

與謝野 晶子

など夢にいまはによびしわれの名のほそき声だにしみはこざりし①

相馬 御風

七十の六十の吾等いそしまず思ふだに楽しいまのうつつに③

吉田 正俊

七光りとふ言葉世にあり一光りだに磨き出さざりしこのおろかはは②

中河 幹子

何ごとの明日はありとも今日をだにまどかに住まばたらへるものか②

九條 武子

名に高き汀の桜幹はあれど枝だに葉だにあらす朽ちたり⑤

尾山 篤二郎

菜の花の風に散らふを見るにだに時経ちにけりわれのつとめも⑤

岡野 直七郎

菜穂子の後、なほ大作のありけりとそらごとをだに我に聞かせよ⑦

釈 迢空

なみたたむよはゆめにだにみるらむのどかにねぶる池の水鳥(新年御歌会)

高崎 正風

波にそひて履がのこせる一筋をかへりみるだにさびしかるべし①

丸岡 桂

南無大師遍照金剛ととなふなりまぼろしにだに吾子よ見え来ね⑥

柳原 白蓮

名もあらぬ草葉の上に露にだにみ空の月はやどるなりけり①

落合 直文

なやみだにあらすな神よ悲しみのかぎりを見つつ生ひにし人に⑤

尾上 柴舟

業平が手植の杜若とある碑文読みて立去る苦笑だにせず⑤

植松 寿樹

汝を恋ふと五百重しき波一つだにかへりて吉備の妹につげよ①

野沢 柿葦

汝が如何に音楽に執し来りしや若き女性の一人だに来ぬ②

中河 幹子

何の座に老いてゆけとや暗渠ゆく汚水すらだに音立てにける⑥

斎藤 史

新衣そでせれば青梅のみのひとつだにつつまかねつつ

昭憲皇太后

新妻が起きて戸をくるその間だに眠りてあらな若きは眠き⑩

尾上 柴舟

敗戦の乱れ聞くだにおそろしき華北奥地に生き得しや弟②

窪田 章一郎

入りがたき青酸加里の手に入らむ日を思ふだに胸をどり来る

江口 きち

白桃の罐ひとつだに送らむと思ひし兄のいづくにたたかふ

山本 友一

跛行文化悲しむ間だになく進む嘆きはつひにわがものならぬ④

谷 鼎

花かげに思ひ見るだにうつくしきが前の世ぞ星なりけらし①

相馬 御風

鼻汁かむと紙を出すだにおそろるやあらはにはせぬ子等がかなしも②

植松 寿樹

花ごろも二人かつぎて舞うてだに亡母招じたき野の綾霞①

相馬 御風

花の妹が咲く日もあらばせめてだにその乗る駒にまぐさかひてむ

大橋 葯房

花やぎし過去はなかりきせめてだに老の課題をたのしみ生きん遠汐騒

四 賀 光子

母を呼び母を待つだにあるべきをもちだしていしなれがいとしさ③

相 馬 御風

母をだにまだわきまへぬ小さき目をつぶらに張りてともし火を見る①

石 樽 千亦

春がすみたちながくして暁の空のゆくかりのかげをだに見む

黒 田 清綱

ひたひより汗はにじみてしばしだに山を歩むはたのしかりけれ⑥

斎 藤 茂吉

人あまたるでだに旅はさびしきを荒野の原をひとりゆくらむ①

明 治 天皇

人思ふうた一つだになく過ぎて清しむといふ生のかなしみ③

生 方 たつゑ

ひと木だに尊からざるものなき神の都の宮崎に來ぬ

白 仁 秋津

一言の愚痴だに云はず病み臥してしづごろ保つは思ひあへずも

宇 都 野 研

人避けてあらむとしつつ一人だに來ぬ日さぶしみ倦みをり①

森 山 汀川

人しげき都の市にききてだにさびしきものを入相のかね②

明 治 天皇

ひとすぢの黒髪にだに仇びとの手な触れそねと思ひしものを⑧

吉 井 勇

ひと谷にわたるやまざと三つとだに軒をつらぬる家はなくして①

井 上 通泰

ひとつだに家にもがなとおもふかな高嶺のいはほ谷の松が枝①

落 合 直文

ひとつだに蟬の鳴けよとふと思ふ昼眠をさましひびくゼット機

谷 鼎

ひとつだに山の見えざる地のはてに日の入りゆくはあはれなりけり⑧

斎 藤 茂吉

一人だに優しく生きて終りたき心は今に嘆かひに似る

河 野 愛子

一つだに善き物はなき今の代と思へれど猶死にたくもあらず③

岡 本 大無

ひとつの塵だにすゑぬ青苔にさつきの雨はしみて降る

中 沢 庭柯

一つ歩を突くだに気魄こもりたる棋譜よみ終り切りとる夜半に②

村 田 利明

人といふものをわれ夜の夢にだに見んを厭ひて生きがなくなる

與謝野 晶子

人の生はすべなきかもよ揺れ動く草の穂にだに夕日差したり⑨

岡 野 直七郎

一葉だに得がてに歎く煙草葉広が畑いましげりたり⑩

尾 山 篤二郎

一葉だにゆれず大樹はしんしんと風をつつみぬ夕立の前

土 屋 残星

ひとハンマー打嚙むすらだに全世界に表情となる今日を思はむ⑨

吉 植 庄亮

ひと日だにいぶせきものをさみだれの二十日あまりもふりつづきたる

明 治 天皇

②

ひと日だに離ることなく幾年をすぐせし母のみまかり給ふ②

石 川 まき子

一日だに早く癒えむと吾れひとり子らにはばかり魚肉をぞ食ふ②

森 山 汀川

ひと日だにひと時だにとくに民のみな祈りをわがおほ君はや①

井 上 通泰

ひと日だにひとつ家にはえも住まず得忘れもせず心くさりぬ

若 山 牧水

ひと日だにみとりせぬ身を病院の夜の廊下に悲しみにけり③

西 川 百子

一日だにわすれぬ君が上なればしのぶともなき昔なりけり②

八 田 知紀

ひとひらの雲だにすゑぬきさらぎの朝の気さきの末をおそるる

太 田 水穂

一片の雲だにあらぬ大空の隈なきに向ひ涙ながる④

太 田 水穂

ひとむらの雲だに見えぬ大空にみちてすずしき夏の夜の月①

明 治 天皇

一むらの雲だになくて大空をゆくとも見えぬ月の影かな

海 上 胤平

ひと目だに母見まほしと思ひけむそのいやはてのこころ偲ばゆ④

矢 沢 孝子

一目だに見て帰らなと頂の霧の動きを待ちつつ久し⑫

尾 上 柴舟

一目だに見ぬ日なかりし愛娘をし手ばなして旅にやりにけるかな⑪⑫

金 子 薫園

一目だに見まほしく夕月のほのけき門へ行きたもとほる①

花 田 比露思

人目だに見放けもせむと尾根を来て信濃路の山は雲かくれたり⑤

半 田 良平

ひと目だに山を目にせであり得んや山にきたりで心変りぬ⑪

與謝野 寛

一もとの梨の木だにもひろりゆく吾がうつそ身の肥えざらめやも⑩

安 江 不空

ひともの松だにみえぬ広庭の芝生の上をてらす月かな①	明治 天皇
ひともの柳だに無きわが庭にせめて植ゑ置く萩と云はねど⑤	中原 綾子
人も世も官もあとだにのこらぬをなど山川のいにしへなるや⑩ 開歩集	尾上 柴舟
一夜だに妻がみとらばせめてもの心やりにもなりけむものを④	矢沢 孝子
一夜だになきながらまもりありなむを我かへりたればただにはふむる ひとよ	古泉 千攄
ひとり正しく生きて疑はざりし人思ふだに早し二十年にして②	村田 利明
一人だに落ちずこそぞりて神国の神は言ふべしやすくは言ふ勿② な	白井 大翼
一人だにとどまるは無き世に住みて老いゆく命などか歎かぬ①	與謝野 禮巖
一人だに似てを行かねばとますらをの人麿さへや哭きしおもほゆ⑩ な	川田 順
一人だに残る兵なく戦死せるこの島の名は永久に消ゆまじ③	久保田 不二子
ひとりだにをみなの子あらば衣帛に彩にぎははむ妻のあたりも② きふ	白井 大翼
独のみ居ればさびしも夢にだに我思ふ妹とふたりして棲まむ	大橋 葯房
日にたまる机の上の塵にだに如かずやひとりわが思ふこと⑥	尾上 柴舟
陽の照りに背きてさむし山池は青々として微動だにせず①	藪 阿久里
日はぬるし女のことを思ふだにものうかるまま眼を閉ちてあり①	近藤 元
雲雀子のなきこばれくる声にだに親はおろかなり子を恋ひにつつ 新萬	山名 薫人
微風だにあらぬみ空に咲き反りておのれゆり居る木連の花① 葉集八	中井 コツフ
微風だに今日はあらねば粉雪は庭の木の葉にもりあがりたり①	中井 コツフ
日焼どめのくりいむつけて麦刈りにゆくわが娘だにいたはらず 青あ	谷 鼎
病院に君またありと聞くにだに心たちまち痛みしものを⑩	尾上 柴舟
冬の雨ふる一日だに厚衾かづきて寝むといふ人のあり⑩	斎藤 茂吉
ふりそめしけふひと日だにいふせきをいつかははれむさみだれの空①	昭憲 皇太后

故郷の河原の小石ひとつだに踏みもあまさじ久にし来ぬれば④	岡本 かの子
ふるさとの由布川の鮎の一つだに食させざりけむおほはを思ふ②	三浦 義一
ふるさとは片山かげの田舎村医師すらだに住みてあらなくに①	花田 比露思
古ると聞くだに我は悲しきを山稜見れば生けりともなし②	天田 愚庵
ふるるだに痛き思ひををみな子のかなしきみにちに思ひいたりぬ	由利 貞三
尻をひらば臭くこそあれ臭気だにたたぬ屁歌をひりかさねつつ⑨	尾山 篤二郎
ポケットの塵ひとつだに詮議すとはばまれし群集門にあふる①	岡山 巖
埃あがる小道一すぢ麥畑のあびだに延びてわが来にし跡③	山下 秀之助
螢だにそれとよそへて眺めつれ君が車の灯の過ぎて行く⑩	與謝野 晶子
北海に住むと思へばうら山の岩つばめだに悲しきものを この道集	與謝野 晶子
舗道の日蔭に據りて息づける犬の群だに見つつおもほゆ①	常見 千香夫
ほととぎすなきつと語る人づての声だにいまだきかぬ年かな	高崎 正風
ほのぼのと花だにかへり咲くものをかへらぬ人のなにぞかなしき①	橘 宗利
掘りかへす土に蚯蚓のたぐひだに棲まぬ都をさびしみにけり 新萬葉集八	峯村 国一
ぼろ船の思惑などといふことをおもひみるだに遠きくらしか 新萬葉集二	金子 善治郎
ポロンバイルに命むなく爆ぜしとのみ想ひみるべきたづきだになし 多磨三	岩間 正男
まれにだに誰かはとはんふる里の庭の紅葉は染めつくすとも③	樋口 一葉
満州国長嶺県は曠野にて川なし山なし石くれ一つだになし①	加納 小郭家
まんまんと流るる水を渡るだにはじめてのごとき向島に来ぬ⑤	植松 寿樹
みいくさやさすがに人のつれにだに来ぬ日となりてもみち移ろふ④	四賀 光子
汀に鯉のつどへば幼子をうちたまひけむと言ふだに泣かゆ②	山下 陸奥
み心は生き継ぎませどわが祖父は盛りの父だに見たまはざりし①	窪田 章一郎
みじめなる地の上の者を哀憐れみて見給ふをだに知らぬおろかさ④	村田 利明

水かはむすべだになしもささの隈日のくまこえて直にゆく駒⑨
水茎のあとだに見たく我欲りて久しくなりぬ君は返さず

みすずかる信濃のくにと聞くにだに君が罷道いたまざらめや⑪

水すましの波紋をだにも動くものといきつきて見むあまり静けさ（鴨戸をこえて）

大山 文子

み空にはたえず夜の雲ゆくらむをゆらぎだにせぬこの心かな⑦

短世に独り後れて生きむ日を思ふにだにも吾れは耐へぬを

道とほく重荷車をひくこゑはよそにきくだにくるしかりけり①

道の辺の草のかき葉の一葉だに己かうけ得たる命はあらむ⑨（瀬の音）

みづうみのかすみのどけし煙はく舟はけふだにかよはざらなむ②

三つ瀬河浅瀬だになき谷水の上漕ぐ舟にわれは乗りたり⑨

蚊竜すむ青洲にたちてひとりだにとらまくすなる人のあらなく

眼ある人一人だにあらぬ世やもなに自をいとしみて沈重にをらむ①

飯は砂擗はいばら一日だにえ堪へぬわざをなほも強ふるか①

目高飼ひてよろこぶ友よその間だに妻亡きなげき忘れて在らしめ①

女々しよといましめにつつ妻や子を忘れて過ぐす一日だになし（支那事案戦地）

岩泉 美鳥

目を挙げて世の中見れば自らを謹しむ人は稀れにだに見ぬ

眼をとちておもひみるだにはれがまし野いばら匂ふ岸にならびて①

黙ふかくそそりたちたる厚朴の樹は今その諸葉微動だにせず⑨

木蓮のたちよそふ頃と思ふだに心はいたし徳島山路町の家①

百鳥のこゑをし聞けはよしゑやし一日だにわれ心しづけく⑩

木琴をたたきてあそぶ孤つかげ秋しばしだにやすらぎあらせよ②

もとむれば大内山のうちにだに我隠処の有世なりけり②

太田 水穂

杉浦 翠子

斎藤 茂吉

大山 文子

尾上 柴舟

宇都野 研

昭憲 皇太后

佐佐木 信綱

井上 通泰

尾山 篤二郎

三浦 守治

岡本 大無

金子 元臣

加藤 洵綾

伊藤 左千夫

荒木 暢夫

尾山 篤二郎

加納 小郭家

斎藤 茂吉

坪野 哲久

渡 忠秋

喪にこもるごとくさびしききのふけふ青き花さく庭木だになし②

物思ひまだしらざりし昔だに秋は夜長く思ひしものを

ものおもふこの心だに無かりせば野の百合のごと安からましを①

ものなべて焼きしといへどわが生きて帰りをだに人祝したまふ⑤

物をだにいひもかはさぬ大空の月しもなどかしたしかるらむ①

物をだに云ひ得ずいねにいねし父蒲団の縞もさやに目にあり⑩

百日だにつぎて降るべみ小止みなく軒うつ雨をききて歩まず⑦（現代短歌大系）

歌大系

森や丘やかへり見るだに胸ゆらく旅果つる日の春の雨かな②

もろもろのつみとが深きわれをだにいたはるごとし日の明るさは

山焼の壮観をいふ黒きより緑に変はる春は思ふだに②

病みてだになほ世にあらばはぎ寺の萩はかくとも語りてましを①

病み長くやつれ給ふと思ふだに悲しみ増して面あげかねつ②

病みふして明日だに知らぬ身にもなほ世のゆくすゑは思はるかな⑥

病む脚のいささか動くそれをだに素直になりて吾は涙す⑨

病める子がとちたるころしはしだにひらくとはせよ淡雪のふる

夕ぐるる空に紛れむ雲にだに果敢なごころは寄らむとぞする③

夕潮に玉藻よる音の秋ほそしさばかりをだに命なる歌

雄心を強ひて静めてありつらむ日を思ふだに人は恋しき⑪

夕だにの北山に立つ曇り雲いまだ寒し雪をはらみつ③

夕やみのかり橋こえて風にだにたわむをとめを帰すがもとな①

雪ばれの今朝仰ぎ見る紺青の空ふかふかと微動だにせず②

ゆく秋を知らずおのれの命だに知らで群れ飛ぶ小さきこの虫③

ゆくと来と音だに立てず目にだにもみえぬものから年といふもの⑧

矢沢 孝子

高崎 正風

関戸 信次

岡野 直七郎

八田 知紀

尾上 柴舟

尾山 篤二郎

相馬 御風

岡野 直七郎

中河 幹子

井上 通泰

遠野 左田子

岡 麓

松村 英一

若山 牧水

松本 常太郎

山川 登美子

尾上 柴舟

中村 憲吉

富岡 冬野

上田 英夫

九條 武子

太田 水穂

太田 水穂